

義理と人情

——善悪システムを通して——

上 田 晃 圓

一 問題の所在

現代社会の「薄情化」傾向がますます増大する一方で、日本における精神的土壌とまでなつて今日なお深く根付いている「義理と人情」のシステムが、単に究極的な現実の表象となつて具象化した江戸前のそれのみにとどまらず、中国仏教、いなそれより以前の善悪システムと複雑にからまり、時代を追つた仏教の精神構造とも共合し具体化してきたことが疑われる。

今日では「義理と人情」は、社会学的解釈では、「義理は個人または集団に対する一方的な責務、人情は人の配慮やおもいやり」とあり、「義理と人情は一つの義理・人情複合を形成し、その複合の内部で義理と人情の比重が変動する心理的交換関係である」と規定されているようである。すでに「公的世界にかかわる人倫と私的世界にかかわる人間の欲望や感情の自然なはたらき」という解釈も指摘されてきた。こ

の原義的解釈を仏教サイドから究明すると、意外な概念の痕跡が事実として浮かび上がってきた。

この究明にあたり次のことを概略指摘しておく。すなわち中国伝播の初期の仏教は、仏典翻訳史上また教学史上においても、ガンダーラの大乗仏教と考えられ、律儀な善悪観（二義的善悪）からより複雑な人道的善悪観（三義的善悪）を内包していた。それは、もはや当初から、解脱の善悪二持の中道とその究極的活動体としての生命を持ち合わせた仏道における生活を志向していたといえよう。釈迦における仏身と法身との概念、すなわち如来または神とスピリットとの概念は、グプタ仏教にいたつて、三種仏身や法性・仏性としてさらに展開、シルクロードを通して、それらは時代を追つて着実に中国に伝えられていたという事実である。このことはその初期の文献資料に中国・日本の思想基盤となる無意識下の構造が組み込まれているのではないかという問題を指摘しておく必要があることである。

二 義理と人情、そのシステム

曹魏（二二〇～二六五）の康僧鎧訳『無量寿経』下巻五悪段に、

其二惡者、世間人民・父子・兄弟、室家夫婦、都無「義理」、不順「法度」、・・・

其五惡者、世間人民・・・父母教誨、瞋目怒瞋、・・・取与無節、衆共患厭、負恩達義、無有「報償之心」。・・・耽「酒嗜美」、飲食無度、肆心蕩逸、魯扈抵突、不識「人情」、強欲抑制。・・・

と記される。義理と人情とに関する古い文献として提示できよう。ここで「義理」は、世間のひとびとの父子や兄弟の室家の夫婦などにおける人倫上の正義（宜）道理をさし、とくに家庭生活における「義理」に言及して「取与に節制なく、みなともに患い厭い、恩にそむき義に違い、報償の心もなし」とある。それは子の親への恩にたいする報償の心をもちあわせた義理をかたっている。「人情」については、その家庭生活活における文のもとに「酒にふけり美をたしなみ、飲食には節度がなく、ほしいままにおろかにも、人情を識らずに強いて抑制しようとする」とある。この場合の人情は家庭内の眷属や家族のころ、他人のこまやかなころをさしているといえよう。

この五悪段すなわち五濁を述べた段落は、従来、儒教の格

義的性格をもちあわせているといわれているが、既述のごとく、その概念規定と人間の様態の表現が異質であることに気づく。事実はむしろ怪で、ギリシアの倫理学に似たところをもちあわせているのである。⁽⁵⁾

三 自然論

康僧鎧の『無量寿経』には自然について、無量寿仏国の莊嚴におけるものや、次のような自然を指摘できる。

○又其国土、微妙安樂清淨若此、何不「力為善」、念「道之自然」、著於無「上下」、・・・（釈迦指勸）

○宜各勤精進、努力自求之、必得「超絶去」、往「生安養國」。横截「五惡趣」、惡趣自然閉。・・・易「往而無人」。其國不「逆違」、自然之所率。何不「棄世事」、勤行求「道德」、可獲「極長生」寿樂無有極。 （釈迦指勸）

○今世恨意、微相憎嫉、後世「転劇至成」大怨。所以者何、世間之事、・・・結「憤精神」、自然剋識、不得「相離」、皆当「対生」、更相報復。 （釈迦指勸）

○彼仏国土、無為自然、皆積「衆善」、無「毛髮之惡」。・・・他方仏國、為「善者多」、為「惡者少」。福德自然、無造惡之地。唯此間多「惡」、無有「自然」。勤苦求欲、転相欺給、心勞形困、飲「苦食」毒、・・・（五悪段結）

○命終得「生無量寿國」、於「七宝華中」自然化生。（信疑得失）

智慧による化生者、心の造作のないこと、また世間には自の

業果に応じた総報として、これらすべてを自然と表現しており、われわれが今日使用する宇宙的物理的「大自然」をも含意する。

このような自然な、智慧なき人間の本性として、同『経』には、

此人、宿世之時無^レ有^レ智慧、疑惑所致。．．．若此衆生、識其本罪、深自悔責求^レ離^二彼処^一、．．．（信義得失）

と記す。五惡を予想させる「本罪」を人間の性（宿業・宿縁）としておさえ、その対立概念を仏の智慧としている。最高善の智慧と人間の性との対称概念の捉え方は性善・性惡の概念とは異質、むしろギリシア的発想、ひいてはメソポタミアやバビロニアの宗教の原点、性善・性惡以前の神と人間との概念を持つてのものではなからうか。

この点、世界の宗教に共通な概念をもちあわせているといえるが、こと同『経』における将来時期からみると、ギリシア思想の影響を拭いさることは不可能であろう。⁽⁶⁾

四 善惡システム

「国を組織した最初の人はやはり最大の善事の原因者である。何故なら人間は完成された時には、動物のうちで最も善いものであるが、しかし法や裁判から孤立させられた時には、同じくまた凡てのものの中で最も悪いものであるからであ

る。というのは不正は武器[・]を持てば最も危険なのであるからである。人間は思慮や徳が用いる筈の、武器[・]を持つて生まれてくるが、この武器[・]は特に反対の目的のために使用せられることも出来るのである。それ故に人間はもし徳を欠いていれば、最も不慮で最も野蛮で、また情事や食物にかけて最も悪きものなのである。」この文は『政治学』の一文であるが、ここには人間の性としての善惡の両面を示し、その善の面にはそれを善ならしめる思慮と正義の徳を背景にしていることを記している。「世界人權宣言」には「世界における自由と正義と平和との基礎」と記し、義務教育のなかで養われる『日本国憲法』前文には、公布勅語にうたわれるが、前文内容には「正義」の言葉のかわりに「公正な信義」とある。また宣言には人間は理性と良心を授けられているとし、前文には思想及び良心の自由とある。善惡の判断は良心を持つものである。その善惡には培わされた「正義」の概念が必要となる。自由なる良心は、万人の認める善惡観、正義観の養育が不可欠であるといえよう。

仏教教団では、この善惡の判断の具体的表象として戒律が有ることは周知の通りである。いま康僧鎧のもたらした『無量寿經』にその善惡の背景を探ると、上述のような義理立てにであう。また、

当^レ熟思計遠^二離衆惡^一、択^二其善者^一、勤而行^レ之、．．．今仏慈愍願^二示

大道「耳目開明長得度脫聞仏所説、莫不歡喜、諸天・人民・
蠕動之類、皆蒙慈恩解脫憂苦。仏語教誡、甚深甚善。智慧明
見、八方・上下・古來今事、莫不究竟。……恩德普覆、福録
巍巍、光明徹照、達空無極。開入泥洹教授典攬、威制消化、
感動十方無窮無極。仏為法王、尊超衆聖、普為一切天人之
師、心隨所願皆令得道」。(勸修道因)

と記される文には、仏を「法王」すなわち最高の立法者とみなし、その善は最高善と示される。その善による慈恩には蠕動の類に至るまで歓喜するとあれば、あらゆる生命がそれぞれの自然の真実のもとに生きること（共存）が説かれているものといえよう。その善なる道は「達空無極」の涅槃道であり、快樂無極の安樂の境地への道である。われわれのこの最高善への行いは、自のころばせである「意志」による「選択」にかかり、このつとめは菩薩行すなわち六波羅蜜多の行をさす。道禁としての戒は、ガンダーラ仏教の特徴である十善道が混在、また恩徳・福録（福德）には、やはりガンダーラ仏教の特徴である「光明」とあいまって一つの脈絡となっている。

五 システムの交替と幸福論

現在未だに判然としないのがマウルヤ仏教思潮であるが、「心」すなわちスピリットの心催しを打ち出している『般若

心經』の起源、大衆部がすでに大乘精神を持ち合わせたその時期などが定かでないことと相まって、施設（仮説）の概念の流行が一つの鍵を握るものである。これらの諸概念が混在したものとして、また釈迦当時から伝説として語り継がれた仏教精神を伝えるものに、ガンダーラ仏教の後漢（二五〇～二六〇）時代の成果である支婁迦讖（一四七～一八六）訳『阿闍世王經』二巻がある。本『經』には、

已從心因緣而可見仏。……生死与脱、是二事、持是作仏
(大正一五・四〇〇b)

と「心根本」とした諸概念のもとに、作仏の法として生死と解脱との二持が示されている。それは人間が現在もちあわせている精神環境の現実を迷悟の同時性の「持」としたもの、他ならない。したがって、

以尊法持我、故知、無逆。譬若菩薩已得忍辱、悉持諸惡、菩薩若慧好願。……諸逆以淨、以得是忍。……一切諸法悉淨無所沾汚。故。是法亦不可汚。所以者何、其道無有瑕穢。故。以入大逆道者、不令去生死不見泥洹。所以者何、其道無已可往者而可近者」。(大正一五・四〇二c)

と記される、涅槃への活動（往き近づく）には、「尊法持我」と示される善持と、忍辱のもとに諸惡を悉持しながら浄化する惡持との両面が示されているのである。この中道は、善惡非二という単なる善惡背捨捨棄とは異質の構造となっている。

そこで義理人情の根源形態にも示唆を与えたギリシア的発想からのこの種の概念把握を『ニコマコス倫理学』からひろうと、

善悪両者は、「善悪いずれでもあらぬもの」にも対立しているから——と。・・・もし快苦の両者いずれもが悪であるならば、両者はともに好ましからぬものであるはずだろうし、またもし両者とも、善悪いずれでもないものならば、それは望ましきものでも好ましからぬものでもないか、ないしはそのいずれでもあるかでないかはならぬ。事実はいかに、ひとびとは明らかに苦痛を悪として避け、快楽を善として採るのである。両者は、だから、善と悪との対立するのと同様の仕方において対立しているのでなくてはならぬ^③。

と示される。これよりすでに善悪の対立と両立が、相対的に成立することを指摘していることが理解できる。善という倫理的な徳は、悪徳と「随意性」において同格であるが、

およそ目的がどのような性質のものとして各人に見えるかということとは各人の生得によるものではなく、やはり若干そのひとの努力いかんにかかるところがあるのだとしても、或いはまた、目的はそれぞれ、各人に生得的に与えられており、ただ、よきひとは彼の目的に達するためにもろもろの行為を随意的に行うからという意味でのみ徳は随意的なのである・・・^④。

とあれば、最高善への目的への努力、すなわち活動そのものが倫理的徳性とみなされているといえる。この活動そのもの

を幸福、ひいては快楽ともある。

この『ニコマコス倫理学』における善への活動としての倫理性の予防的效果あるいは立法上の政治に対して、『阿闍世王経』や『無量寿経』では、阿闍世や世俗の人間の避けられぬ悪業と、法への帰依信順における活動としての善業との対立と両立、そして抑止としての浄化の構造をもちながら、窮極的な心の安静・活動としての幸福へと進展する宗教的救済の構造を持ち合わせている。これが善悪中道のパラドックスの本来といえないだろうか。

ヘーゲルをして『小論理』に「神は無であるという仏教徒の定義も同様に正しい。仏教徒はこの原理をつきつめて、人間は自己を絶滅することによって神となると主張している」とまでいわせた「無我」すなわち作仏における「諸法無我」^⑤は、単に生我（人我）としての無のみならず、法我の無をもしめす。空の義理は、他力・自然を貫いた我法二無我としての自我として成長するものであろう。

我法二無我と、義理と人情としての「善と不善（煩惱・随煩惱）等の心心所法および不相応行法」は、一種の義理我と人情我としてすでにグプタ仏教において一つの成果を修めている。これは唯識思想として中国で熟成されていった。なお正義観と人情との活動形態として最大限の許容量をもって展開した法界思想は、中国において、独創的発想とその体系を

もつて鼓吹されたものと浄土教や禅風との二つの「行大系」の流れのなかに吸収、特異な進展を遂げて日本へと伝わったことも併せて言及しておこう。

六 結び

日本に招来された仏教はすでに早くからこの『無量寿經』が親しまれており、いな、むしろ中国における大乘仏教そのものがこのようなギリシア思想、ひいてはギリシア思想を吸収した初期のキリスト教をも包括した一大仏教思潮として經典を通して受容されていたとみられ、それは如来・自然の概念のなかで、義理と人情として芽生えていった。義理社会のなかにあつては「法と行」として、ことに日本特有の「人情」は和歌を通して、「もののあわれ・をかし」から、風・ひととなり（風体）。わび・さび・風流・堅気浮気・俠客にいたるまで庶民感情をうたいあげ、習俗とからまつて成長したものと考えられる。なかでも「もののふ」から武士道へと展開する義理と人情には、儒教などのアレンジを受けて、特有の正義感と稽古あるいは気質・通が生みだされ、この社会システムが商人（町人）社会や今日の農業社会に至るまで浸透していったといえないだろうか、浄土教（また禅宗）の現社会に残る痕跡であろう。そこには「はかなくも」幸福への義理と人情が、特異な日本文学の形態としても痕跡をとどめ、明治

から今日に至つてもなお、西欧型と称される多欲構造の資本主義経済の精神のなかで、一方には矛盾すること無く、日本人の意識構造のなかに組み込まれているといえまいか。

- 1 南博『日本的自我』（一九八三）、四〇頁
- 2 源 了圓『義理と人情』（一九六九）、二四頁
- 3 『中庸』第七章によると「仁者人也、親親爲大、義者宜也、尊賢爲大、親親之殺・尊賢之等、礼所生也」とある人の親しむ様々は仁とあり、賢善を尊ぶ宜（ヨロシサ）の様々を義と示す。宜義は一種の正義である。この儒教的な宜義の義理に対して、この五悪段では、第二悪には、世間の義理として、父子・兄弟・夫婦のほかに主上臣下（君臣・中外の知識をあげる。その君臣の義理とその法度に順うところについて、①主上をないがしるにして臣下が任用され、②欲しいままに分限を越えて行動し、嘘八百、③形勢と地位を知り不正をはたらく、④妄りに欺いて忠・良をそこない天心に当たらない、などの条件にあわないこと。夫婦の義理については、①奢淫嬌縱して快楽をもとめ、②その心のおもむくままにまかせて互いに欺惑し、③心口・言念に真実がなく、佞諂不忠・巧言諛媚して、④賢善を嫉み謗り、冤枉に陥る、などの条件にあわないこと。また父子・兄弟においても義理には互いに欺瞞のないことをしるす。また第四悪には「不孝二親・輕慢師長・朋友無信」と、子の親への「孝」、弟子の師長への敬愛、朋友への信の条件を示し、そして第五悪には、父母と子における恩義・師友の義が示される。これらの義理は『孟子』滕文公における五倫（父子・君臣・夫婦・長幼・朋友）における親・義・別・序・信）のように、また『書經』秦誓の五常

（父義・母慈・兄友・弟恭・子孝）のように簡明に概念規定し示すところがない。なお室家（家室）の意味は金谷治訳注『論語』二六九頁によった。

4 五濁は劫・見・煩惱・衆生・命として『阿弥陀經』に記されるが、『俱舍論』にはその順序が「壽・劫・煩惱・見・有情」とあり、解説には「劫滅將・末壽等鄙下如・滓穢・故・説名為濁。由前二濁・如其次第・壽命資具極被・衰損」。由次二濁・善品衰損。以耽欲樂・自苦行・故・或損在家・出家善・故。由後一濁・衰損自身。謂・壞自身身量色力念智勤勇及無病・故。」（大正二九・六四a）と示す。この五惡段には、第一惡は、「諸天人民・蠕動之類、欲為衆惡、強者伏弱、転相剋賊、殘害殺戮、不知修善、惡逆無道、後受殃罰、自然趣向、神明記識、故有貧窮・下賤・乞丐・孤独」。又有尊貴・豪富・高才・明達、皆由宿世慈孝・修善・積德所致。天地之間、自然有是、雖不即時卒暴成至善惡之道、会当歸之」と生まれ出たこの世には善惡道が自然にあり、惡は惡に、善は善に歸す必然の道理が記される。この惡は、修善を知らざるがゆえの自然淘汰的な神明記識の必然、つまり却濁を推察させる。第二惡には上記注(3)の義理・法度が無く、また不順のゆえの惡としめされている。そして「世間人民、心愚少智、見善憎諱」等と記すことから、正見なき見濁を予測させる。第三惡には、世間の人民が「相因寄生共居天地之間、上有賢明・長者・尊貴・豪富、下有貧窮・賤賤・危劣・愚夫、中有不善之人。常懷邪惡、姪妹・愛欲交亂、貪意・興師相伐、攻劫殺戮、強奪不道」と、社会生活における尊卑上下の中にあつて、貪欲からの身業を引き起こす惡、「著於人鬼」ともあれば、身業にまつわる煩惱濁を予見させる。第四惡には、「兩舌・惡口・妄語・綺語、讒賊

鬪亂・憎嫉善人、敗壞賢明、不孝二親・輕慢師長・朋友無信、難得誠実、不能自知、為惡無恥、天道自然不得蹉跌」と人間の惡業としての四語業を中心とした、資質の低下にともなう惡、すなわち衆生濁を予知させる。第五惡には、本論文および上記注(3)にも示すように家庭生活、つまり社会生活としての健全な生活を人情と三業、ことに心意と信より追求している。これはまさに命濁を示しているとして理解できよう。

5 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』上巻（一九七一）第五章には市民社会的・家政的「正」について論じ、ことに下巻（一九七三）第八卷第十章には、父親対息子・夫婦・兄弟についての愛を、また第十一章には、父親的・君主と民・夫の妻への兄弟のあいだの愛、支配者と被支配者・主人対奴隸の關係を、また血族的な愛、ならびに親友仲間の愛などについて子細を論じている。本書ではこのような血族的な義理は国制の模倣とし、義理よりもむしろ「愛」における關係において捉えている。なお注(6)参照。

6 旧訳聖書における「原罪」に対抗する『ギリシア神話』（高津春繁訳、一九五三）四〇頁ではプロメテウスの火を盗んだ罪があげられる。また『メソポタミア神話』（矢島文夫、一九八二）では罪あるティアマトの神々から人間が造られたとある。『ニコマコス倫理学』（既出）には「人間の魂は、同じく無ロゴスのでありながらそれでいて或る仕方ではロゴスにあずかっている。『ことわり』と戦い『ことわり』に対抗するとき、本性上反ロゴスのな或るものが見られる。無抑制的なひとびとの衝動は『ことわり』と反対の方向に赴く」（上巻五二・五三頁）と人間の精神において自然本性としてロゴスのな面と無ロゴスのな面の両面を持ち合わせていることを述べ、処々に生物としての「自然

本性」および人間としてのそれを区別して、はば広く論じている。その無ロゴスとしての一面が広く「人間の不善の罪」を語るところは注意するに値しよう。自然については出隆訳『形而上学』（二九五九）巻上、一六一頁以下を参照。アリストテレスが『靈魂論』において能動的知性を説くその起源として、アナクサゴラスの「理性を動物のうちに存するように自然のうちに内在するとみて、理性をこの世界のすべての秩序と配列の原因である」とした説を示す。同書三六頁および三七七頁の補注を参照。

7 山本光雄訳『政治学』（二九六一）三六頁

8 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』巻下（二九七三）一五三、四頁

9 高田三郎訳『ニコマコス倫理学』巻上（二九七二）一〇六頁

10 松村一人訳『小論理学』巻上（二九五二）二七〇頁

（キーワード） ガンダーラ、ギリシア、無量寿経、阿闍世王経、五濁、自然、中道、我

（龍谷大学非常勤講師）

新刊紹介

湯田 豊 著

ウパニシャツド

——翻訳および解説——

A5判・七二二頁・定価二三、〇〇〇円
大東出版社・二〇〇〇年二月